

戦争体験からの回復過程に影響を及ぼす要因に関する探索的研究

——沖縄県高齢者の生活史調査と調査研究を通して——

吉川 麻衣子

(九州産業大学大学院 国際文化研究科 臨床心理学コース 博士課程)

<要 旨>

本研究は、沖縄県の高齢者が、辛く悲惨な戦争体験を肯定的に捉えるようになった過程（回復過程）、その過程においてどのような事柄が影響を及ぼしているのかを探索的に検討することが目的である。また、戦後 59 年を迎え、戦争体験者が高齢化している現状を鑑み、戦争体験に関する基礎的資料を収集することも目的としている。

第 1 研究では、20 名の高齢者を対象に面接調査を実施した。回復のきっかけとなった事柄として、19 項目（6 カテゴリー）が抽出された。戦争での体験、抱えている苦悩、戦後の人生は多様なため、回復の過程を一概に言及することはできないが、戦争体験を生かし、生存者としていかに生きていくかが重要なものかもしれない。戦争体験者の複雑な戦後の過程を辿り、把握するためには、さらに事例を蓄積して検討を行う必要がある。

第 2 研究では、220 名の高齢者を対象に質問紙調査を実施した。その結果、本研究の対象者は概ね肯定的な感情をもって戦争体験を回想していること、戦争体験に起因する精神的、身体的不調を抱えている者が多い可能性があることなどが示唆された。また、「戦争体験を語ること、体験を共有すること」が回復にもっとも影響を及ぼしていた。

今後は、戦争体験に纏わる苦悩を語ることによって解放したいと望んでいる者にとって、体験を受容するきっかけとなり得るような活動を展開していきたい。また、世界で悲劇が繰り返されるたびに、悲惨な戦争体験を再体験し悩まされている者も多いことも明らかになったことから、戦争体験者の思いを世の中へ広く伝え残していく活動も行っていきたい。

<キーワード>

戦争体験、沖縄県高齢者、回復過程、PTSD

【はじめに】

老年期の発達課題である「自我の統合」は、人生をふり返る過程において、過去の出来事を再評価することによって達成されるものとされる（Erikson, 1989）。人によって、ふり返る過去の出来事は様々である。しかし、わが国が経験した戦争は、現在の高齢者にとって、老年期に想起されやすい年齢時期（石原, 2000）、歴史的事件の影響をもっとも受けやすい年齢時期（Baltes et al., 1980）であったことなどから、統合感を獲得する過程で困難をもたらしやすいライフイベントの一つとなっているのではない。

先行研究では、多くの高齢者が日頃から頻繁に戦争体験を回想することや、男性高齢者は戦争に起因する不応状態に陥っている可能性が高いなどの示唆が得られている（山口, 1996；長田・長田, 1998 など）。諸外国では、戦争に

起因する PTSD 症状や痴呆症状との関連など、戦争がもたらす長期的影響に関する示唆が多く蓄積されてきている（Kulka, 1990；Herman, 1992 など）。わが国では、戦争体験に着目した心理学的研究は寡少であり、とくに、太平洋戦争末期に住民を巻き込む地上戦が展開された沖縄県では皆無であった。そこで、吉川（2001）は、戦争体験をどのように捉えているのかを中心とした基礎的調査を実施した。その結果、戦争体験を否定的に捉えている者が多く、全体として、その割合は、関東近郊での高齢者を対象とした長田・長田（1998）と比して高かった。また、否定的に捉える者は統合感得点が低いことも示され、沖縄県には、戦争体験の受容の困難さが、現在の不応状態の一要因となっている者が多い可能性が示唆された。

しかし、彼らが一様に否定的な評価を示しているのではなく、「確かに戦争は辛く悲惨な体

験ではあったが、あの体験があったからこそ今の自分がある」と自己形成に役立つ有意義な体験であったと肯定的に捉え直している者も少なくなかった。そのような、否定的な戦争体験に対する「捉え方の肯定的な変化」を本研究では「回復」と定義する。その回復過程において、どのような事柄が影響を及ぼしたのか、また、回復の過程はどのようであったのかということについて、探索的に検討することが本研究の目的である。

また、太平洋戦争の終戦から今年で 59 年が経ち、戦争体験者が高齢になった今、彼らの思いを伝え残す作業は、ここ数年のうちにしか取り組むことのできない研究課題であると考え、戦争体験に関する資料を収集することも本研究の目的の一つとする。

＜第 1 研究＞

【目的】

戦争体験に対する捉え方の変化（回復）のきっかけとなった事柄を収集することと、変化の過程についてインタビュー調査を通して明らかにすること。

【方法】

1. 対象者

沖縄県内において語り部活動を行っている高齢者 25 名に対して本研究の趣旨を説明し、20 名（男性 7 名、女性 13 名；平均年齢 76.6±5.02）から承諾が得られた。実施 1 週間前、実施日当日に再度参加の意思を確認した。

2. 手続き

インタビューは、筆者があらかじめ用意した質問内容について、話の流れを遮らない半構造化面接を通して行われた。話したくないことは無理に話さないでよいこと、無理に思い出さなくてよいこと、途中で辞退しても構わないこと、そして、本研究は心理学の基礎研究であり、特定の政治・宗教や思想信条にはまったく関係がないことを説明した。また、実施場所は対象者の要望に添い、全ての対象者の自宅において行われた。

3. 内容

①戦時中の体験、②終戦当時の思いと現在の思い、③戦争体験に対する捉え方の変化に影響を与えた事柄と変化の過程の 3 点を中心に生活史を聴き取った。

【結果と考察】

1. きっかけとなった事柄とその意味

対象者 20 名から挙げられた、きっかけとなった事柄 19 項目を筆者と臨床心理学を専門にする者 2 名で分類したところ、6 カテゴリーに整理された（表 1）。

表 1. きっかけとなった事柄

①追想・追悼

- ・戦地訪問
- ・戦没者の遺骨収集
- ・祈念碑や資料館への訪問

②歴史的節目

- ・本土復帰
- ・戦後 50 周年を迎えて

③真実を知り訴えること

- ・自らが経験した戦争の真実を知ること
- ・平和活動への参加

④体験の開示と共有

- ・戦争体験を語ること
- ・手記や体験記を執筆したこと
- ・他者の体験を知る機会を得たこと

⑤戦後の生活の充実

- ・家族や友人の支え
- ・仕事の充実

⑥沖縄の精神文化

- ・戦没者の 33 回忌を終えたこと

⑦その他

- ・生き残った者は戦没者の分も精一杯生きなくてはならないという思い
- ・戦禍を生き抜いてこられた精神力を励みにする
- ・長い時間
- ・個人的な体験 など

□追想・追悼

戦争当時、自分自身が負傷した場所、ずっと身を潜めていた防空壕、戦地で一緒に戦っていた友人が亡くなった場所、戦没者の御霊がねむる祈念碑を訪れたという内容であった。ある対象者は、戦地を訪れ、友人の遺骨を収集し、遺族に届けた。そのことについて、「新たな人生をスタートさせるために必要なことだった。それまでは、戦争のことを思い出すことも話すことも避けていたが、冷静に自分の体験、自分の過去と向き合えるようになったと思う」と語った。この項目を挙げたいずれの事例においても、終戦から 10 年以上が経過した後そのような行動をとっていた。戦争で多大な被害と悲しみに暮れた方々にとって、当時の記憶が思い出さ

れる場所にはなかなか近づきたくないという思いがあったのだと推測される。

□体験の開示と共有

第1研究の対象者は全て、戦争体験を語る活動をしている方々であるが、これらの項目を挙げた対象者は、語ることを「聞き手との対話の中で体験を再吟味する機会」と捉えている点が特徴的であったように思える。つまり、戦争の悲惨さを伝えるということの意味合いよりも、「自分の人生にとっての戦争の意味を考える機会」になっていたと考えられる。また、「体験を文字にすること」は、体験を外在化、客観化することを助け、「自分自身の体験と対峙できる」という感覚を得ていたようだ。

□沖縄における33回忌の意味

沖縄では、33回忌を過ぎると死者の霊は今までよりも遠いグソー（後世）に去って、神の国に行ってしまうと信じられている（城間，1990）。また、それまでの期間は、旧暦の1日と15日に祈願を欠かさないという伝統文化がある。そのような意味から、33回忌を終えてしまうことで、死者との距離が遠のき、余計に寂しさが増してしまうことも考えられるが、ある対象者が語ったように、「これからは私の人生を生きるもいいんだ」という一種の開放感を与える節目になることもであると推測される。

2. 回復の過程

個々の事例の詳細については、未だ対象者の承諾が得られていないため、現段階で掲載することは差し控える。

Herman (1992) は、心的外傷を抱えた者の回復過程には三段階があると述べた。第1段階において、生活全般の安全の確立がなされると、第2段階においては、外傷のストーリーを語ることで、外傷的記憶は形を変え、当事者の生活史の中に統合されるようになると同時に、被害者は、自己の外傷による喪失体験を服喪追悼することができるようになる。そして、第3段階では、未来を創造し、新しい自己を成長させ、新しい関係を育て、新たな信念を発見していかなければならないとされる。具体的には、まず闘うことを学ぶこと、次いで自分自身と和解すること、さらに他者と新しい関係を結ぶこと、その中で生存者使命を発見することであると述べた。

当然ながら、戦争での体験、抱えてきた苦悩、戦後の人生そのものが多様であるため、一概に

回復の過程について言及することはできないが、戦争を生き抜いた者として、いかに戦争体験から学び、後世に伝え残していけるかが語り部活動を行っている本研究の対象者にとっては重要であったと推測される。回復のきっかけとなった事柄というのも様々ではあるが、各々にとって体験を人生における有意味な出来事として統合していくきっかけとなっていたのではないだろうか。

また、インタビューを実施した印象として、筆者との対話の中で、戦争体験に対する捉え方や語りの変化、新たな見方が展開していったケースがいくつかあった。今後は、そのような点にも注目して、事例をあらためて整理したい。

<第2研究>

【目的】

沖縄県の高齢者の戦争体験に関する基礎的資料を収集することと、戦争体験に対する捉え方の変化に影響を及ぼした諸要因について、実証的調査を通して明らかにすること。

【方法】

1. 対象者

沖縄県内7地域（都市地域4、農村地域3）に在住する高齢者220名（男性101名、女性119名；平均年齢76.6±6.39）を対象とした。各地域で事前に本研究の趣旨を説明し、承諾が得られた方のみを対象とした。

2. 手続き

第1研究と同様な説明をした後、筆者が直接個別面接を行う中で質問紙調査を実施した。筆者が質問項目を読み上げ、逐一解答を得た。対象者のペースに合わせて、質問内容に纏わる会話を交えながら進められた。対象者からの要望がない限りは、筆者と対象者との個別面接の形態がとられたが、要望があった場合には、家族などを交えて実施された。また、質問項目が多いため、適宜休憩を挟んで実施された。なお、調査内容が対象者に与える心理的影響を鑑み、全対象者にアフターフォローを実施している。

3. 内容

①現在の精神的健康 (LSIK, GDS) : LISK (Life Satisfaction Index K) は、George (1981) の主観的幸福感に関する概念に基づき、改訂PGCモラールスケールより5項目、LSIAより3項目、カットナー・モラール・スケールより1項目の計9項目で構成されている尺度である。

GDS（日本版 Geriatric Depression Scale 短縮版）は、計 15 項目で構成され、身体症状に関する質問がないこと、二者択一の方式で回答しやすいことなどから、高齢者に適した尺度であり、疫学調査などで広く用いられている（新野，2002）。

②パーソナリティ：本尺度は、鈴木（2002）が沖縄県の高齢者を対象にして作成した ACL（Adjective Check List 形容詞評価尺度）で、性格 5 因子特性理論に基づいている。50 項目に対し 5 段階で評定を求めた。

③戦争当時の属性：長田・長田（1998）を参考に筆者が作成した。内容は、太平洋戦争開戦時の立場、沖縄戦開戦時にいた場所、沖縄戦中の立場、沖縄戦終戦時にいた場所、終戦当時の思い、戦争から受けた被害感、身内の戦没者の有無、戦争での負傷の有無、戦争中に体験した出来事である。

④PTSD 症状：長田・長田（1998）と Hovens et al.（1993）の尺度の一部と筆者が作成した質問項目を含んでおり、18 項目に対し 5 段階で評定を求めた。

⑤戦争体験の回想：長田・長田（1998）の一部を含む 5 項目に対し 5 段階で評定を求めた。

⑥戦争体験に対する捉え方：長田・長田（1998）が作成した尺度を用いた。尺度の内容は、「人生に悪影響を与えた戦争」「自己形成に役立った戦争」「戦争責任の意識」「自分を変えた戦争」「戦争への心理的距離」「人生を左右した戦争」の 6 因子（22 項目）から構成されており、各質問に対し 5 段階で評定を求めた。

⑦捉え方の変化意識ときっかけ：「終戦から 58 年の間に、戦争体験に対する見方が変わったか」について、「かなり変わった」から「全く変わっていない」の 5 段階で評定を求めた。また、どのような捉え方の変化があったかを自由回答で求めた。きっかけとなった事柄については、第 1 研究より抽出された 19 項目にその他を加えた 20 項目の中から回答を求めた。

【結果と考察】

1. 戦争当時の属性

戦争当時の属性として、沖縄戦が展開された 1945 年頃の立場を表 2 に示した。

2. 戦争体験の回想

戦争体験の回想に関する 5 項目の内容及び回答状況を表 3 に示した。戦争は人生の中でもっ

表 2. 沖縄戦中の立場

	男性(人)	女性(人)
①兵役	16	
②防衛隊	21	
③義勇隊	4	
④学徒隊	10	14
⑤戦闘補助	11	20
⑥婦人協力隊		19
⑦徴用	6	13
⑧県内疎開	8	20
⑨県外疎開	4	13
⑩戦地を彷徨う	15	18
⑪その他	6	2

とも辛い体験であったと捉えているものの、その中には良い思い出もあるとし、戦争体験を懐かしい思い出として回想していることが明らかになった。また、辛い時に戦争中の苦労を思い出することによって、自分を励ますという道具的回想（Watt & Wrong, 1991）を行っていることも示唆された。戦争体験の回想に関するいずれの項目においても、長田らの結果よりも上記の傾向を示していたことから、本研究の対象者は、戦争体験を肯定的な感情をもって回想していることが示唆された。

3. PTSD 症状

PTSD 症状尺度の項目内容及び回答状況を表 4 に示した。突然、今、自分が戦争中の状況にいるような感覚になる者（11%）、戦争を想起させるようなものを避ける者（26%）の割合は、先行研究と一致していた。しかし、戦争中の夢を見る者（61%）、破裂音などの特定の刺激に過剰に敏感な者（30%）など、PTSD 症状に関する回答率は、概ね相対的に高い傾向にあった。沖縄県には、戦争体験に起因する精神的、身体的不調を抱えている者が多い可能性がうかがわれた。

4. 戦争体験の捉え方

戦争体験の捉え方尺度の項目内容及び回答状況を表 5 に示した。全 22 項目を用いて因子分析（重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転）を行った結果、「戦争がもたらした悪影響」「戦争体験の受容」「戦争の真実への追究」の 3 因子 20 項目となった。項目内容及び因子分析の結果を表 6 に示した。

戦争体験を通して得たものはあるとし、自分

の人生において戦争体験は意味のある体験であったと捉えている者が多いことは、長田らの結果と一致していた。しかし、戦争によって多くのものを失ったと捉えている割合は相対的に多かった。「失ったもの」としては「尊い命」や「青春」が多かった。20万人以上（推計）の県民が犠牲になったことや、対象者の85%が身内を戦争で亡くしていたこと、17歳～21歳の間に戦争を経験している者が多かったことなどが影響しているのではないかと考えられる。

また、男性は、戦争さえなければ今よりも幸せになれたと悔やみ、戦争により将来の夢を断念せざるを得なかったと捉える傾向がみられた。男性は、61%が直接戦闘に参加し、戦争での負傷により転職をせざるを得なくなった者が多かったためにこのような傾向がみられたのではないかと推測される。

5. 回復の過程に及ぼす影響要因

諸要因が回復の過程にどのような影響を及ぼしているのかを把握するために、捉え方の変化の有無を従属変数とし、諸要因（性、年齢、パーソナリティ、PTSD症状、精神的健康、捉え方、きっかけとなった事柄、戦争による被害感と被害度）を投入して重回帰分析を行った。重回帰分析の結果を表7に示した。

結果、パーソナリティ要因では、「神経症傾向が低いこと」「調和性が高いこと」、きっかけでは、「体験を開示、共有すること」「歴史的節目」「33回忌」をそれぞれ回復のきっかけと捉えていることが有意な影響力を示した。また、「人生満足度が高いこと」「抑うつ度が低いこと」も戦争体験に対する捉え方の変化に影響を及ぼしていた。

もっとも影響を及ぼしていたのは、「戦争体験を語ること、手記や体験記を執筆したこと、他人の体験を知る機会を得たこと」であった。辛い体験を語ることによって、自分の人生における戦争体験の意味づけができ、再統合されて捉え方が変化したのではないかと推測される。また、同じように戦争を体験した者のことを知ること、「辛い思いをしているのは自分だけではない」という思いが賦与されるのではないかと推測される。しかし、「戦争体験は自分にとって大事な出来事だから心にしまっておきたい」と捉えている者が必ずしも不適応状態にあるのではなく、彼らは「抱えていられる強さ」に支えられた適応的な対処を講じているのだと

思われる。

また、調和性が高い、つまり、利他的であることが影響を及ぼしていた。沖縄の県民特性として、「やさしさ」や「助け合い」の精神が挙げられ、「その精神の上に地域社会が成り立っていることが長寿の要因の一つである」とされる（新崎，2000）。共に戦禍を潜り抜けてきた者たちが、支え合いながら過ごせる環境が、戦後の生活の糧になっていたと考えられる。

調査を実施した印象として、「テューター主義（もっと気楽に）」という県民特性も戦争体験を肯定的に捉える上での一要因ではないかと感じられた。戦中から戦後の苦しい時代を乗り越えてきた者にとって、「不幸な過去をくよくよ思い煩うな」ということを意味し、精神的な痛みを和らげたのではないだろうか。

＜総合考察と今後の展望＞

沖縄県には、戦争での苦悩を抱えたまま現在に至っている者が相対的に多い可能性が示唆された。恐らく誰にとっても辛い体験を受容することは困難であるだろうし、調和的な地域社会と言え、心理社会的に孤立した高齢者は少ない印象を受けた。今後は、聞き取り調査のような単発的な関わりだけではなく、長期的な関わりの中で、戦争体験に関する研究を継続する必要がある。

また、戦争体験を語ることについて「語りたいが、語る場（場所、相手、機会）がない」とする者が多く、戦争体験の記憶にまつわる苦悩を抱え、それを語ることによって解放したいと望んでいる者、他者と体験を共有したいと望んでいる者が各地域に点在していることが明らかになった。よって、戦争体験を受容する「きっかけ作り」となるような活動を実践していきたい。

さらに、世界で悲劇がくり返されるたびに、戦争体験を再体験してしまうことに苦悩していると語る者も多かった。様々な社会的課題も含めて、戦争体験者の心の中の戦争はまだ終わっていない。多くの対象者から「せっかく話したのだから、私たちの体験や思いが、どうか教訓になるようにしてほしい」という要望があった。戦争体験者の思いを広く伝え残していくことが、扉を開いてもらった者の使命なのだと痛感している。

【引用文献】

- 新崎盛輝 2000 沖縄が長寿地域なのはなぜか 沖縄の素顔 テクノ Pp.136-137.
- Baltes,P.B., Reese,H.W., Lipsitt,L.P., & Lewis,P. 1980 Life-span developmental psychology. *Annual Review of Psychology*, 31, 65-110.
- エリクソン,E.H. 村瀬孝雄・近藤邦夫(訳) 1989 ライフサイクル, その完結 みすず書房
(Erikson,E.H. 1982 The life cycle completed : A review. New York : W.W.Norton.)
- ハーマン,J.L. 中井久夫(訳) 2001 心的外傷と回復 増補版 みすず書房
(Herman,J.L. 1992 Trauma and Recovery. : Harper Collins Publishers, Inc., New York.)
- Hovens,J.E., Falger,P.R.J., Op den Velde,W., Mweijer,P., de Grown,J.H.M., & van Duijn,H. 1993 A self-rating scale for the assessment of posttraumatic stress disorder in Dutch resistance veterans of World War II. *Journal of Clinical Psychology*, 49, 196-203.
- 石原 治 2000 高齢者の記憶 太田信夫・多鹿秀継(編著) 記憶研究の最前線 北大路書房 Pp.267-283.
- Kulka,R.A., Schlenger,W.E., Fairbank,J.A., Hough,R.L., Jordan,B.K., Marmar,C.R., & Weiss,D.S. 1990 Trauma and the Vietnam War generationn : Report of findings from the National Vietnam Veterans Readjustment Study.New York: Brunner/Mazel.
- 新野直明 2002 沖縄の高齢者の精神的健康度-抑うつ症状の有症率と関連要因について- 崎原盛造・芳賀博(編著) 健康長寿の条件-元気な沖縄の高齢者たち- ワールドプランニング Pp.61-66.
- 長田由紀子・長田久雄 1998 高齢者の戦争体験の人生における意味と老年期の適応に関する研究 平成7年-平成9年度科学研究費補助金(基盤研究 C)研究成果報告書.
- 城間政州 1990 戦禍のかげに-三十三回忌-メンタルヘルスを語る-心の安らぎを求めて 沖縄高速印刷 Pp.285-288.
- 鈴木征男 2002 沖縄高齢者の性格特性 崎原盛造・芳賀 博(編著) 健康長寿の条件-元気な沖縄の高齢者たち- ワールドプランニング Pp.119-127.
- Watt,L. & Wong,P. 1991 A taxononmy of reminiscence and therapeutic implications. *Journal of Mental Health Counseling*, 12, 270-278.
- 山口智子 1996 高齢者の回想-主観的幸福感・時間的展望との関連 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 43, 163-173.
- 吉川麻衣子 2001 老年期の精神的健康と人生における戦争体験の意味づけに関する探索的研究 琉球大学法文学部人間科学科人間行動専攻過程卒業論文(未公開)

【謝 辞】

本研究は、筆者が東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理学専攻に所属していた際に提出した修士論文(2003年度)にあたる。ご指導を賜りました九州産業大学大学院の村山正治教授に対し、心より感謝申し上げます。また、本研究の遂行にあたり、ご支援を賜りました御財団に対し、厚く御礼申し上げます。

最後に、本研究に快くご協力下さいました沖縄の方々、感謝の言葉を捧げたいと思います。貴方・貴女の思いを必ず伝え残していくことをここにお約束致します。ありがとうございました。

表3. 戦争体験の回想に関する項目に対する回答状況

	まったく 当てはまらない	どちらかといえば 当てはまらない	どちらとも 言えない	どちらかといえば 当てはまる	非常に 当てはまる
1. 戦争体験をなつかしく思い出すことがありますか	4.1	25.1	12.8	37.9	20.5
2. 辛い時に、戦争中の苦勞を思い出して自分を励ますことがありますか	0.9	12.8	3.2	37.0	46.6
3. 戦争中の思い出には、いい思い出もあると思いますか	17.8	18.7	20.5	32.0	11.4
4. 戦争のことは、思い出しても意味がないと思いますか	46.1	30.1	16.9	7.3	0.0
5. 自分の人生にとっての戦争の意味について、考えることがありますか	2.3	26.5	8.7	47.0	16.0

※数値は、全体(220名)におけるパーセンテージを示す

表4. PTSD症状尺度の各項目に対する回答状況

	まったく 当てはまらない	どちらかといえば 当てはまらない	どちらとも 言えない	どちらかといえば 当てはまる	非常に 当てはまる
侵入性・反復性の症状	22.3	33.6	5.9	27.3	10.9
1. 戦時中の体験(記憶)を突然思い出すことがある	35.0	27.7	7.7	25.9	3.6
3. 戦争中の辛い体験に今でも悩まされることがある	30.9	14.1	10.0	37.3	7.7
5. 戦争中のことを思い出して、悩むことがある	27.7	17.7	14.1	35.0	5.5
6. 戦争中の夢を見ることがある	15.0	20.0	4.5	40.5	20.0
7. 突然、今、自分が戦争中の状況にいるような感覚になることがある	61.8	22.3	5.0	10.9	0.0
9. 何を見ても、何を聞いても、それが戦争のことを連想させる と感ずることがある	72.7	26.4	0.9	0.0	0.0
10. 戦争中のことを思い出すと、気持ちが落ち着かなくなる	28.6	22.7	13.2	31.4	4.1
13. 戦争中のことを連想させる場面(テレビなど)を見ると、 発汗したり身体が強ばったりする	52.3	24.1	7.3	16.4	0.0
14. 戦争中に起きたことについて考え始めると止められない時がある	45.0	22.7	4.5	27.3	0.5
回避・麻痺の症状					
12. 戦争体験はなるべく思い出さないようにしている	52.3	17.7	12.7	16.4	0.9
16. 私は、戦争を思い出させる状況を避けている	46.8	20.0	13.6	17.3	2.3
17. 戦争に関係するもの(テレビなど)を見ないようにしている	43.2	22.3	8.6	23.2	2.7
18. 戦争中のことを思い出そうとしても、思い出せないと感ずることがある	56.4	22.3	4.5	12.3	4.5
過覚醒の症状					
2. 私は、音などの特定の刺激に敏感だと思う	35.0	27.7	7.7	25.9	3.6
4. 私は、驚きやすい方だと思う	32.3	38.2	9.5	18.2	1.8
8. 私は、寝付きが悪い方だと思う	9.1	30.9	10.9	47.7	1.4
11. 私は、恐がりな方だと思う	31.4	38.6	14.1	14.1	1.8
15. 私は、突然、イライラして怒り出すことがある	46.4	32.7	8.6	12.3	0.0

※数値は、全体(220名)におけるパーセンテージを示す

表5. 戦争体験の捉え方尺度の各項目に対する回答状況

	まったく	どちらかといえば	どちらとも	どちらかといえば	非常に
	当てはまらない	当てはまらない	言えない	当てはまる	当てはまる
1.戦争は、私の人生を大きく変えたと思う	14.5	19.1	3.6	18.6	44.1
2.戦争体験によって、私は精神的に強くなったと思う	1.4	20.5	13.2	29.5	35.5
3.戦争体験によって、私は精神的に弱くなったと思う	39.5	22.7	9.5	26.8	1.4
4.戦争に負けたことによって、自分の価値観は変わったと思う	1.4	22.3	7.3	44.5	24.5
5.私は、戦争の犠牲者だと思う	18.2	19.5	7.3	25.5	29.5
6.戦争によって、むしろ私自身の人生は好転したと感じる	25.5	32.3	15.0	21.8	5.5
7.戦争体験から得たものはあると思う	0.5	20.9	18.6	30.9	29.1
8.開戦したことによって、将来の夢を断念せざるを得なかったという思いがある	35.0	22.7	11.4	15.9	15.0
9.敗戦によって、将来の夢を断念せざるを得なかったという思いがある	35.5	18.6	11.4	19.1	15.5
10.私は、戦争によって、多くのものを失ったと思う	10.0	18.2	2.7	24.1	45.0
11.戦争体験は、自分の人生において全く意味のないものだったと思う	40.9	22.7	11.8	16.8	7.7
12.もし戦争がなかったら、私は今よりも幸せになれたと思う	29.5	14.5	3.2	20.0	32.7
13.良くても悪くても、戦争によって今の自分があると思う	1.4	17.3	5.9	40.0	35.5
14.今でも戦争さえなかったらと悔やむことがある	34.1	14.1	2.7	15.9	33.2
15.私にとって、これまでに戦争以上に重要な体験があったと思う	36.8	28.6	5.9	17.3	11.4
16.戦争は遠い過去のことだと思う	13.2	23.6	5.5	36.8	20.9
17.日本は、戦争によって他国に迷惑をかけたと思う	3.2	4.5	17.3	40.5	34.5
18.今の自分には、戦争による影響はほとんどないと思う	24.5	30.5	5.0	18.6	21.4
19.戦争によって、自分の思うような人生が送れなかったと思う	33.2	13.6	5.0	25.9	22.3
20.戦争での真実は、できる限り明らかにすべきだと思う	1.4	3.6	15.5	48.2	31.4
21.もしも戦争に勝っていたら、自分の人生はもっと良かったと思う	25.9	21.8	21.8	18.6	11.8
22.戦争体験を次の世代に伝える役割を自分自身に感じる	4.1	13.6	26.4	37.3	18.6

※数値は、全体(220名)におけるパーセンテージを示す

表6. 戦争体験に対する捉え方尺度の因子分析結果

(重み付けのない最小二乗法, プロマックス回転)

	Factor I	Factor II	Factor III	h2
I. 戦争がもたらした悪影響 < $\alpha = .96$ >				
1. 戦争は、私の人生を大きく変えたと思う	1.011	0.198	-0.045	0.794
10. 私は、戦争によって、多くのものを失ったと思う	0.995	0.129	-0.021	0.833
18. 今の自分には、戦争による影響はほとんどないと思う ※	0.876	0.002	-0.020	0.775
5. 私は、戦争の犠牲者だと思う	0.841	-0.104	-0.072	0.886
15. 私にとって、これまでに戦争以上に重要な体験があったと思う ※	0.780	0.227	0.027	0.404
4. 戦争に負けたことによって、自分の価値観は変わったと思う	0.666	0.007	0.159	0.409
9. 敗戦によって将来の夢を断念せざるを得なかったという思いがある	0.624	-0.255	0.093	0.636
14. 今でも、戦争さえなかったらと悔やむことがある	0.607	-0.344	-0.114	0.872
12. もし戦争がなかったら、私は今よりも幸せになれたと思う	0.603	-0.357	-0.056	0.838
8. 戦争が始まったことによって、将来の夢を断念せざるを得なかった	0.600	-0.256	0.131	0.588
19. 戦争によって、自分の思うような人生が送れなかったと思う	0.592	-0.394	-0.004	0.841
21. もしも戦争に勝っていたら、自分の人生はもっと良かったと思う	0.501	-0.364	-0.007	0.648
II. 戦争体験の受容 < $\alpha = .94$ >				
2. 戦争体験によって、私は精神的に強くなったと思う	0.216	1.073	-0.060	0.814
13. 良くても悪くても、戦争によって今の自分があると思う	0.143	0.884	0.066	0.681
7. 戦争体験から得たものはあると思う	0.003	0.867	0.113	0.858
3. 戦争体験によって、私は精神的に弱くなったと思う ※	-0.074	0.844	-0.021	0.788
11. 戦争体験は、自分の人生においてまったく意味のないものだった ※	-0.114	0.762	0.022	0.736
6. 戦争によって、むしろ私自身の人生は好転したと感じる	-0.268	0.555	-0.063	0.552
III. 戦争の真実への追究 < $\alpha = .80$ >				
17. 日本は、戦争によって他国に迷惑をかけたと思う	-0.027	-0.098	1.042	0.999
20. 戦争での真実は、できる限り明らかにすべきだと思う	0.200	0.240	0.602	0.474
固有値	11.584	2.027	0.819	
因子寄与率 (%)	57.921	10.137	4.095	
累積寄与率 (%)	57.921	68.058	72.153	
< 因子間相関 >				
	Factor I	Factor II	Factor III	
I. 戦争がもたらした悪影響	1			
II. 戦争体験の受容	-0.759***	1		
III. 戦争の真実への追究	-0.247***	0.444***	1	

※…逆転項目を示すが、反転させた後の得点を用いて分析を行った。

表7. 諸要因が捉え方の変化(回復)に及ぼす影響<重回帰分析結果>

	平均値	SD	B	
性(1.男性/2.女性)	1.54	0.50	0.005	
年齢	76.58	6.39	-0.026	
外向性	35.09	10.68	0.029	
神経症傾向	27.56	11.61	-0.221	*
調和性	36.90	8.04	0.142	*
開放性	27.05	8.53	-0.099	
誠実性	30.88	8.67	-0.006	
被害感	3.84	1.26	-0.026	
被害度	10.89	3.65	-0.013	
侵入性・反復性の症状	21.07	8.69	0.069	
回避・麻痺の症状	8.10	4.29	-0.009	
過覚醒の症状	11.59	4.47	-0.083	
追想・追悼(1.なし/2.あり)	1.24	0.43	0.010	
歴史的節目(1.なし/2.あり)	1.08	0.27	0.145	**
真実訴える(1.なし/2.あり)	1.14	0.34	0.037	
体験開示共有(1.なし/2.あり)	1.29	0.46	0.269	***
生活の充実(1.なし/2.あり)	1.09	0.29	0.052	
33回忌(1.なし/2.あり)	1.15	0.36	0.160	**
LSIK	5.28	2.39	0.225	*
GDS	5.16	4.31	-0.264	*
戦争がもたらした悪影響	37.97	15.04	0.140	
戦争体験の受容	21.30	6.35	0.133	
戦争の真実への追究	8.03	1.70	0.049	
重回帰係数(R)			0.907	***

***p<.001 **p<.01 *p<.05